



〈夢に賭けた人生〉

ジャーナリスト
松本侑壬子

「マリメッコ」という言葉をご存じですか？ そう、日本でも人気の高い北欧生まれのシンブルで大胆でかわいいデザインのパッション・ブランドのこと。マリメッコ (Marimekko) とはフィンランド語で「小さな Mari のための服」を意味する。Mari を組み替えると Armi となり、創業者アルミ・ラテイアの名前はマリメッコの中に生き続けているという。本作はマリメッコを生み出し、世界のブランドに育て上げたアルミ (一九二〇〜七九年) の、夢に向かってすべてを賭けた強烈な波乱万丈の人生を描く。それはまた、戦後の働く女性の一つの足跡でもある。

ヘルシンキの美術学校を出て結婚、夫と織物工房を立ち上げるが、戦争で閉鎖。二男一女を育てながら広告代理店で働く。戦後は夫の業務用オイルプリント会社を手伝ううちに、個人向け

に綿のファブリック (布地) にプリントすることを思いつく。一九五一年にマリメッコ社を立ち上げ、鮮やかな色々と大胆なデザインのパブリックで、女性たちを窮屈なコルセットから解放し、新時代のライフスタイルを創り上げるよう提唱。シンブル・タイムレス・ユニセックスを原点に、一枚の生地をどんな風にまとい、洋服にして着るかを見せるファッションショーは、今見ても新鮮で楽しい。高価や豪華ではなく知的で自由なファッションを六〇年代のファッション・アイコンだったジャクリーン・ケネディ米大統領夫人らが愛用した。

いまやアルミの人生そのものになったマリメッコを支えるのは、有能自由でパワフルな女性スタッフたち。まるで「家族」のような彼女らのために職住一体となった理想郷 (マリメッコ村) をつくろうと奔走するアルミ。そ

んな妻についていけなくなっていた夫との仲は険悪になり、大きくなった子どもからも疎外される。家族に理解されない、愛されない寂しさを酒や他の男性で紛らわせようとするアルミ…。

六七歳で死去するまでにアルミは、マリメッコを人口五百万人のフィンランドから世界中で愛される人気ブランドに急成長させた。当時には稀な女性企業家として男性中心のビジネス界で、破天荒な性格と類まれなアイデアと実行力で何度も襲いかかる破産の危機を乗り越えた。その生き方を支えたものは。劇中アルミが随所で口にする「語録」がそのヒントになるだろうか。「責任を取ること。批判を恐れないこと」どのほどの重圧にも妥協しないこと。「注意深く計算し、考えずに行動すること」「避けた方が良いことは―経験、空想、賢いカウンセラー」と。

本作の構想に五〇年もかけたという監督は、矛盾も功罪も善悪好嫌も含む多面的なアルミの人間像を、劇中劇の形で、主演女優がアルミという人物を観察し語るというユニークな二重構造方式で描いた。たしかに夢に賭ける人生の厳しさが伝わってくる。



『ファブリックの女王』

フィンランド映画 (85分)

監督: ヨールン・ドンネル

出演: ミンナ・ハーブキュラ、ラウラ・ビルン、ハンヌ = ベッカ・ピョルクマンほか

5月14日よりヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国順次公開

©Bufo Ltd 2015